

Vol. 1 お前が俺の眼になり俺がお前の脚になる

タンDEM自転車って？

「タンDEM自転車」は、1台の自転車に複数のサドルとペダルが備わり、複数人が前後に乗り駆動する自転車です。まだまだ知名度や理解度が低く、日本の自転車文化に根ざしていくには険しい道のりが待っています。まず、タンDEM自転車が走るのに道路交通規則の改正が必要という事に驚かされたのは今から30年前のことでした。主人が扁桃腺炎の治療薬が合わず薬害で視覚障がいになったという試練が我が家を襲いました。薬害の試練を乗り越えて生き抜こうとする主人の口から「タンDEM自転車があれ、お前が俺の眼になり俺がお前の脚になれるのよ」。股関節が弱く長距離歩行が難しい私との生活を夢見て出た言葉を受けて、探し始めた時でした。「タンDEM自転車は走行許可がおりていないので走れませんよ」。エッ、何で自転車走れるのに許可がないの？1978年、長野県では外国人が普通に乗っているの許可をおろしていたのですが、2県目となる兵庫県はそれから30年後に視覚障

がい者の働きかけにより許可されるという、特異性を感じました。このような状況下では地方公務員であった主人は諦めざるを得ませんでした。

パニック障害からの立ち直り

そんな主人が薬害から20年近く生き抜いたある日、大好きな畑仕事をしていた時に突然脳幹梗塞で10時間ほど天国へと旅立つという試練に見舞われます。私はパニック状態に陥る事象となり、未だに記憶が取り戻せていません。この時子育て支援などの活動をしていて関係で昼間は人との交流があり何とか気持ちを保つことができたのですが、夜になると涙ぐむ日々。何とかして気持ちを切り替えなければと思っていて、時に筋ジストロフィーの友人を訪ねました。僅かに動く人差し指で「薫ちゃんに会えて嬉しい」とパソコン文字を打って会話をする姿に、パソコンが苦手と避けている自分を恥じ、帰って「タンDEM自転車 検索」と打ってみたのです。そこで愛媛県がタンDEM自転車の

走行許可をおろすことを知ったのです。

知覚動考ゆえのスタート

主人の1周忌を迎える直前の出来事です。何かしら運命的なものを感じて、後先何も考えずに東京からタンDEM自転車2台・主人とツーショットの写真入りTシャツをわずか2週間足らずで揃えて、2010年8月1日に城山公園で10名ほどの体験会を開催する流れを作ったのです。この時何故か共同通信の羅さんという記者が取材に来てくださり、徳島新聞と那覇新聞に記事が載るといふ不思議な出来事が起きたのです。そして動いたことで見えてくる問題は山積みで、パイロット(自転車の前席で運転する人)の確保が必要。軽車両扱いのため交通ルールの確認が必要。Coパイロット(後部座席に乗る人は前方が見えにくいいためパイロットのコミュニケーション力が必要であると同時に、Coパイロットの報告義務の重要性などが、安全走行には欠かせないことを実感しました。

人生経験を社会に還元

聖路加国際病院の日野原先生の「高齢化社会の今こそ、人生経験を社会に還元す



る」という言葉に背中を押され、視覚障がいの主人との生活で学んだことを活かして、主人の夢と共に生きていこうと「タンDEM自転車NONちゃん倶楽部」と命名して私59才の人生再出発となりました。一つ一つ気づいた問題点を解決しながら進めていく中で、一番に県警のご協力をお願いして2012年から安全講習会を開催することから取り組んできました。安心・安全の上こそ楽しみがある。タンDEM自転車は相互責任という意識が大事であるため、障がい者だからという特別扱いには成り立たないということ、共に学ぶことが大事だということ大前提のもと活動をスタートさせました。

Vol. 3

繋がるペダルで心をつなぎ夢を描けば夢叶う！

障がいとは？

「タンDEM自転車NONちゃん倶楽部」の活動から多くの学びをいただきました。重度の身体障がい児のお母さんから「元気に産んであげられなかったと自分を責めた」と聞き、お産は女の偉業(命懸け)と言われる中で、悩んでいた母に寄り添えないだろうかと自転車のツール探しにも力が入ります。脳性麻痺で自力歩行ができなかったけれど、諦めずリハビリや手術を受けていた大翔君、小学校入学前にモヤモヤ病で視覚・言語・半身麻痺になった比呂志君、水上バイクに撥ねられ両上下肢機能全廃となり文字盤会話の秀太君、高校時に脳動脈奇形破裂で半身麻痺になった陸君、妊娠中の子宮頸がん発見から28週目の帝王切開で脳性麻痺・座位保持困難な楓雅君、網膜色素線条症で突然視覚障がいになった美由紀さん、網膜芽細胞腫で3歳で両目摘出の翔君、網膜色素変性症により30歳で視力を失った明さん、先天性網膜色素変性症

技術班のなせる技

1893年デンマーク生まれのタンDEM自転車。婚活ツールでのカップリング率は非常に高い。防災訓練では子供たちが大きな力を発揮してくれる。視覚・知的障がい、ダウン症の方も問題なく乗車できる。個別の対応が必要な肢体不自由児たちは車椅子などを扱う梅澤さんとの

人の輪に支えられ

59才のおばちゃんが、何も考えずに始めた「タンDEM自転車NONちゃん倶楽部」の活動。思いだけは誰にも負けないけれど、自転車のイベントなんて行ったこともなければやった事もない。何とかなるさケセラセラ!! 楽家ゆえの開き直りが功を奏して、人の輪が広がり始めました。NPOの活動は資金的な問題が大きく、志を全うするためには喜ぶだけで徳を積む「随喜功德」を柱に据えたボランティアスタッフが必要です。トライアスロン中島大会会場に乗り込んで出会う山下さんのおかげで、南予の高速道路開通記念サイクリングにチャレンジでき、シクロツーリズムしまなみさんのイベントで出会ったテレビディレクターの稲生さんから愛媛県自転車新文化推進課の河上さんに繋がり、沢山のサイクリストの方々が力を貸してくださいるようになりました。皆さんはトライアスロンやトレイルラン・SUPなど色々な趣味を持つアスリート。身体の使い方や技能にも詳しいお陰で、予想以上

の成果を導き出してくださいます。それに加えて自転車の整備や障がいの状況によってツールに手を加え工夫を施してくださる技術班。ツールの搬送を引き受けてくださる移送班。食という字は人を良くすると書く、イベントに欠かせない食事。愛媛薬草会や官足法愛好会で出会った方達が豚汁・漬物・スイーツなどを提供してくださる、名付けて「胃袋つかみ隊」。お役に立てるならと集まってくださる多方面のボランティアの方々。総勢年間延べ人数600人によるNONちゃん倶楽部のイベント空間に漂うエネルギーは半端なく凄い!! お陰でこまごまの活動ができていく幸せを噛み締めています。

体験に勝る教訓は無し

生きていく上で大切にしている「知覚動考」は、机上論ではなく先ず動くことで気が付いたことを工夫するという意味がある。「障がい」という言葉は聞いたことがあるけれど接する機会はありません。というから完璧な人間なんていないのだから、足りないとい

るを補い合うのが人の世と思いい、気軽に声をかける自分の性格。出会った方とは、先ずは共に時間を共有し理解を深めることが一番だと思いい、イベント企画を考えていくことにしました。特別自転車が好きでもなく長距離走行の発想は浮かばない(笑)。いろいろな体験(特に海が好き)と一緒にやってみよう。そんな気持ちから視覚障がい者にバナナポートの体験をしてもらった時のこと。私は「ひっくり返らないように!」と願いを込めて見守りますが、「ひっくり返して欲しかった」と言われしました。皆と同じようにスリルも楽しみたいと思っているのだから、守ろうという気持ちそのものが区別していると感じかされたのです。それからは本人の意思に任せることにしました。

雨天中止の言葉を削除

2014年、初めて「サイクルチャレンジin競輪場」を開催した時のこと。目が覚めると雨が降っていたのですが、170名の大イベント。天に向かって「晴れました! ありがとうございませす」と祈

りを込めて開催したところ、バンクを走る頃には雨が上がり無事終えることができました。これも視覚障がい者から「私たちは歩くことしかできません。行くと決めたら雨が降ろうが槍が降ろうが行きます」と言われ、健常者のキャセラーはありつつも、障がい者は全員参加で、楽しむことができたのです。

それ以降、NONちゃん倶楽部では「雨が降ったらどうするの?」という「たら」が禁句、「晴れました! ありがとうございませす」の完結語のみでの運営が常識となり、イベント費用の口スがないのも自慢です。

津賀 薫

参加者全員に声をかけてまわす。隣の秀太君も楽しそう



出合いで乗れるようになりました。大翔君には、靴をペダルに固定して足の踏み込み角度を補正、右麻痺の陸君は右足をペダルに固定し、ハンドルを握る手もサポーターで固定する工夫を。個々の補助具の製作でサイクリングが可能となりました。諦めていたことが出来た時、人の心のエンジンは大きく駆動し始めるのです。

心が震える先には金色の道がある

エンジンが駆動し始めると勢いを止めることができません。一明さんはトライアスロンへの挑戦を宣言し、イベントで出会った浅井さんがガイドを引き受け、2023年全盲の鉄人誕生を成し遂げました。大翔君と陸君、左半身麻痺の梨乃ちゃんは今なみ海道縦走70km挑戦を宣言し、2023年夢を実現。この時、一明さんと栄さんの

入手した車椅子ごと乗れるBIG SUP



マッサージ、パイロット(タンDEM自転車前席の運転者)も一丸でフォロウ。普段生活の家族も共にタンDEMサイクリングにチャレンジし、成し遂げた瞬間!! 人生の大きな糧となったと確信しています。そんな先輩の姿に刺激を受けて、座位保持困難な楓雅君がラクラクくんでの目的の地到達を遂げました。全盲の純江さんがタンDEMサイクリングの喜びを物語にし、ボランティアの有理恵さんが挿絵を描いた絵本を小学校に寄付。正に「心が震える先には金色の道がある」の実践ができた喜びです。

生命は海から誕生した

2022年、車椅子ごと乗れるBIG SUPに出会い、その心ときめく海のツールを手に入れてしまいました。さて、どこに置こう? に始まり、日本代表選手だった今治ロイヤルクラブの井手さんとの出会いもあり、10年越しの海の体験活動はさらに中身の濃いものになっていきます。

海のツールを通して「人として生き抜くとは?」をテーマに、「CHALLENGE OCEAN NONちゃん倶楽部」もスタートしました。「知覚動考」。先ず動いてから考えることが大事だと思うNONちゃん倶楽部です。